

研究・調査報告書

報告書番号	担当
85	滋賀医科大学福祉保健医学講座
題名 (原題/訳)	
Cross-Sectional Volumetric Analysis of Brain Atrophy in Alcohol Dependence: Effects of Drinking History and Comorbid Substance Use Disorder アルコール依存者における脳の萎縮容積測定に関する断面調査：飲酒歴と薬物使用の影響	
執筆者	
James M. Bjork, Stevem J. Grant, Daniel W. Hommer	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Am J Psychiatry 2003; 160: 2038-2045	
キーワード	
アルコール依存、薬物使用、脳萎縮、灰白質、白質	
要 旨	
<p>(目的)マリファナやコカインの使用による脳萎縮がアルコール消費の程度によって変化するかどうかをアルコール依存者において検討すること。</p> <p>(方法) 30歳から50歳のアルコール依存男性134人において、MRIを使用し全脳皮質の灰白質、白質の画像を得て、脳萎縮を評価した。コカインもしくはマリファナ使用歴の有無によって萎縮の程度を比較した。</p> <p>(結果) 年齢調整後、飲酒の程度が重度であるほど灰白質、白質容積ともに小さかった。他の薬物使用がないアルコール依存者(51例)は、他の薬物使用のあるアルコール依存者(50例)に比べて、加齢による灰白質/白質容積比の減少の程度がより大きかった。また、他の薬物使用のあるアルコール依存者は、年齢と頭蓋内容積で調整後の白質容積との間により傾きの急な負の相関関係がみられた。しかしながら、年齢と共に極度の多量飲酒を重回帰解析において調整すると、コカイン使用はどの脳容積測定においても独立の要因ではなかった。</p> <p>(結論) コカイン使用によって、アルコールによる白質の萎縮が悪化するが、極度の多量飲酒者ではコカイン使用の影響を受けないことが明らかになった。</p>	